九三
百花六
三

本宗

遠山奇談巻之三

○第十一章　小畑へふたゝび帰り深山の面影しく墓のうけをとつひあてさす

ほく小畑村奥山平太郎ハ再びかへり来て山おく
のことも噺する中ふうの墓をかひたることといへば
平太郎が親類も悦ぶ先をしるかめはうしくおもひける
にみのくやどりせし所ハ小屋ハ炭ひあて道てあり六
七十あまり里人ハ五六人づゝ推茸岩茸なども取るとて
きれおつぐる由ハ先ッ山奥へ分ふいづて行やひとりも
ふるび不案内にかれひ人をもつて是をとえせしむる小屋ハ
わづか猪ひく網なども入れくふかりとこへども人はあり

さうれども尋ねど見れば小屋を見つくふたゝり道とか
きうちなし道が皆へそこふ商りしるん　されば先ず推茸と
いふもの食もつのふ墓に出る道なれんとけれども何さそう
おそろしくぞ思ふ　何の文殊のくぐさ行がたき道ハいかる峡
ありてうて不審し何かそれふ付けあるの山径もそれ幼雉と
ねさぎれ猿子などを閉て見ぬするに山中ふてハ幼雉をひきし
そめあるべし　おのく方墓も枉ぞろれ全く何ハ変丹楹を
かんどそれけの見るひめべしや年ることハひまれへうたがふに
おもめぐるところしとあそきり是がいよ多くぞあるよ
い平常に平太郎の当行とまてまふ命を捨道んぞ

山中文庫

もろ山はいちふ道なしくいづくとたふいちるぐのあ
めづりとくさづくつられと休息しとろり

○第十二章　もくづれる　西仏山　古釜の事

即月十五日みもろ山へ伝教青蘭山へ入んといつる因縁
いづれも見ときろくきこしたんやふつきすしあろも
俗ろるると数松寺にて道理なくさども侯松と
見生くりたるくに見ときくうれこうて大ものろ
ろ今むろくいふせび孟子の母機と載ふふ仏方
日本無双の大伽藍とふてびるい市門出のあまり
應隆悪道必隆無同の陳雲無一善のうれくが

とおく井下化衆生の利益にあつけしめまくと学
せられいちどりれうれ尖のためふ尖しとて力及びくく
なれい和ぶまくしいるまれり行のあふこれぐ来しや
けどめいさみつるくし彼大伽藍再び建るい人のため
たらば徳と蒙り恩と謝するい人道のあくこれさへ稚
うるくうふ其仏の親生とあるれをあてしかして
祖国せられるくく隠念親生ぬ一ふ所まひられ
ら親生と捧ぐ。又初思惟の所行とうたやいそれ
難悪能悪い業のうふ社稷一為親いくひもく
あるせられいい行ぬで今のうれくのまひとあるれを

親せ[illegible]りけふなくべい正覚をじとちをひ真正菩提成
就せ[illegible]ゝをくべ行の経をあんけうわさとおもへば
邪常摩身をも行ず命の惜をんを見も地ごくの苦
をふくべ妖怪もおのれうをんをうる悪鬼邪道の
障碍をなすとも 祖師の法華へをくべ私同地獄の業を
ふるの御恩をもべちをれをぞたの事ふ身をこををも九牛
ご一毛も仏恩をれ報るまで をうれが地ををにをじと
氣をを引出られをよ因幡ゆ[illegible]に出をり四里ばかり来れば
をを[illegible]ゆ[illegible]十余丈の岩門と岩屋をちをりふこをんをを
州信州のさをへ長沼をいをり[illegible]屋敷のごをくをを岩屋

るけへも立降るれ脊をりをごをくを方れ谷屋ををにして
いををを岩ををるをれをを岩をををををををを岩をををを
をををを又六十丈余をををををををを滝あり那智の滝とあゞ
むしをやうふををる先りへ鑿のゞれゞ西澤山を大木ををを
をんを岩ををり一丈二尺五寸 九尺五寸 又本猫栗をゞ
の大木 一丈三尺五寸 七尺五寸 岩ををり。さてしりゝぶ
をを鑿りあひて闇夜のごをくに成滝の音のをををををて
ををあをゞ出ををふ大岩をゞへ岩をををををををををの
ををををををををををふ人馬毎ごをくに麓徑
あり岩をゞひふ逆ふををう横折ををををにあをざれが

けたくさ名高きうどんとあやしげふんくそいわつり松年
これとけ〳〵見いまちく山男の無法なるべし此山富と
いふものい往無数りして山林田畑あく山のせいとうと又
元とけ此山まうるとうて生つるが定めりあれるんしお
かくうちとふ不審とけしぬ此事い拾治弟作悪治ふもて
宿とりむ雲十六りい山東内とあるを元て教会十人
梶谷山へめるに七つ釜〳〵ありて大流七つありぐ
まもみよ半ばるれ多流無源してもるぐ水名
四方一里ばど洗して去も雑所〳〵流壺ととべて釜と
いつり古釜のうちう登りく梅ありー丈三尺ばる 塩地

梯八九尺ばり数多もふ 振一丈九尺ばり うどく 性面ふ志ひ
ひうつり 難所と陵ちうとと見るもくに日も夕湯ふ
ぬとぶ大木大岩ふ〳〵り 拾えぐと 拾ひまもて 彩と
〳〵あるいちふ宿りぬ

○第十三章

保山ふ布り白き 怪獣ふ出会 又所牛 こぐふ 怪史を たうふ

ちうとい出うげふやぐり 炊をくいかさうふ 飯と 焼るぐ
行ちうん 三白ろう 獣を 布りろ 面へ 出ろ 白くも 拾 枝
みく 竹 それば 面ち 逆 ありぬ 密 して 又 走りろ ゆ 点
元 敵 焼 梳 とまくうちうふ 又 逆 さる あるり 元
ちうぬ 面 点 ちうふ 古 落 と 咲 やうた と こ ば こ て

又まる去る法仏降りて　猫ゐる去とちあてふ
それふ答付そのゆく家へ迎したられるおそれてゆ又毛
去ーかぐも又去まる去る法ゆ○て月ゐ三去る後地をさ
付るに又答付そのゆく火ぐとと切く放つた胴腹どつとち
ぬれそ去ども去ゆ又迎去去法ゆ去迎去りて法る
血と去去ーと去ーて仏ども周ーーこゆ去ゆ去ゆ去ゆ猫ゆ
二人去去去暮いゆ去にゆ千る牛ゆ去に法去休地去去
ゆ去壁ゆ切ゆ去去ゆ去ふ去ゆ歌去去ゆ去ゆ去
名と去ゆ去ゆ去全く膝歌去良大き猫ゆ去ゆ去ゆ去
去ゆ去毛ゆ去去二人余狸ゆ去ふ去ゆ仏ゆ去ゆ去ゆ大ゆ

じゝとべて毛をつゝ鷲の毛地をとる毛金くゝの
ふちのふ思びずして走るものゝ色ちゝんゝと
山猫と狸と鼠と鼠と数々いと都の猫の猫の
又山乗こゝもゝゝ猫大山ゝ屋やと鼠
木ゝゝぶとゝるゝ思ゝ又ゝ合ゝゝ
ゝふゝゝゝゝ猫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝゝ色ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

深山の起叩も又佛ちゝゝれど山女の者新行幸感絵
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○第十四章　梶谷山より絵巻とゝのゝ山中ふ
有り義中ふ木の首わ苦ゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆるべ〳〵 縁の網戸とり物 たべものしてやとこうた
行てん物 みてもしも生のはうれやいつくなく
まふわるうちゝ糸人のもれ一日に無方衆をれ
ぐ〳〵へ氷とつくことたるてふ竜く紫さ
目とはもー こいうるこやいふ海のれいそ今へ
夏くし紫ぐ新みぐりうふうちゝ陽く氷み
天井ちるぐ〳〵まのくひ人の物るとも色とうれど
星の光ゝ白やへ物るに世だりかく用ちぐへ
みてたくうるぐ〳〵いつり苦ゝ年ちう天竜の
つうるくうれば遠ゝ人とひくてこれとうふひ

都せー大木の枝ふ物とけくる清九ふ水井うる人の
乳蜜さぐけくるてふうりが作ゆそいうれわあ
ふ乳後せんぐりかりが 色とうけ いあすぐ
ろーそれど 地さるれう 地ー又頭とうげうれく
どれ都ふうり大者と角建いて変 志乳脚ふせう
うれば ちれ男ぐ ぐ やうんと入せものく行ゆ
もゆー 行へーや 濃ぐ 仲それば二人のれとうくぐ色
たるめの中 いや生色くものぐ 遠入ーげ 化生のれ
いつあふうりぬ物く生色ちくれ今のハ行ふやう
んしいでも 物ー うくなば 皆目ちへゆると

○山男
永嘉記曰安国縣有山鬼形如人而炎石鱉食人不敢犯之能冷人病文
○海録襍事曰嶺南有物髯雄曰山文雌曰山姑髯雄素曲山姑トイフモノ起ラバ類カ追テカガフベシ

やまぬだりてしばらく平らに出たるはり
なるべうしん今の寺掛ふ等に用いまいしるふ四つ二人の
あ到しるもの休めるに所あるうち俄ふ起て用と
ひしたりてうしんやの仏生和ふ斗くいつくしんなる
さんの池に満沢能郎鹿名ふいまよ大木ありと
ありて大きなるなだのりふ大木ありてあり見えて
なるとあるべく変えりしとば赤ふ色ふ変られも
そのごとく変えりしられ変ふ一つんのこひとうくまふ
山男ふやしんいふこれ山ふ山男ありしいしいが
さてい生和のの山男ありしふ生ふ赤ふ平らふ射て

こゝろに付て平伏せしに心もちいかゝと問へば答へて
平伏にそれに行のうらけも是歳ふかそれ世を是さのこと
ふこゝろに付水の天井こゝろしいあるのうこゝろ
しかりあひ世を是は こゝろ彼も岩山の光蛍
ふあゝこゝに徑ありも此山男の毎こゝ法こゝろんこいよく
ゆこゝふこゝれり此山男い山神こゝいへべきたぐひ
こゝ彼り月山ゆこゝ此こゝふ少しべ見ふ付こゝれこゝ
へ此変れ志れいこゝれこの利欲のためこゝに唯仏菩の
ありがこゝたり義記こゝるこゝれば祈こゝちまへのまこゝに
仏智れ御伝ゆこゝりかこゝゆこゝるこゝ也へこゝ大井

心こゝりこゝれば天地よこゝてる悪鬼神皆こゝぐこゝくこゝろこゝ
諸天善神こゝぐこゝくこゝろひる常に守こゝこゝ仰こゝれ
又天神地祇いこゝぐこゝく菩薩の人こゝちこゝこゝ御教
化此こゝ是せこゝれこゝこゝこゝこゝば欲長い事也こゝれこゝの
現益と擁護こゝこゝればいよこゝこゝれこゝば性生報いこゝこゝで
こゝこゝこゝこゝこゝこゝ張こゝ

○第十五章　きしんの家にやどり

美の苦ふこゝりこゝ此山へ行こゝれば数多の大木あり
樹二本とこゝる是をこの木こゝ矢こゝこゝこゝ弘法こゝや
こゝものこゝ先こゝこゝこゝ此山東内の人へいこゝいこゝ

さればきじんの家(いゑ)ありとはいへどもそれに宿(やど)かるべしとていへ
みぐるしくきじんとやらておそれしまに多勢(たぜい)をなかば(わけ)返にそれは
鬼(おに)のすむおうどに山住(あなだち)まく木地挽(きぢひき)世(よ)わたりとする
者あつといふものゝと噂(つゞさ)にいへばまるしらうひとふく
きじんといふはあまざれしておそろしげに思ひ返がそれはこれ
たよりくつぎ行く繪(ゑ)ゞとそ急(いそ)ぎそるが木地挽(きぢびき)の者あつ
もいとんやうまゝなしうふんゆけさるがくれあがりし
まうちに木地挽(きぢびき)のすくなれバ谷(ふく)もまるやしと思ひかの
なまだのちろびあめ(ぎ)ことを問(とひ)しれ此(この)さん廉(かど)けぶとりふ
ふりまえまだあり　心うだといふ山のあまざれきとうてその下に大寐(ねぶ)おおき

しいて見とゞめふ器ゐでゝくるれば歌をしぼる事ハ
枕草子一段とゆゝしかれば村〳〵ゞ海浜山と
沢山いづれも大よ家の所ゆゝ後景いとゆゝも遠往所
相乗尾山とも廉々ゆゝ見後ゆゝ所ゆゝの大ゆゝだの
ゆゝ〳〵ゆゝに人のゆゝもゆゝ〳〵ゆゝと八里半ゆゝ入
うのゆゝゆゝびゆゝとゆゝるに嶮難とゆゝのゆゝてゆゝ〳〵ゆゝゆゝ
びゆゝとゆゝ付ゆゝで立ゆゝ立ゆゝりゆゝれゆゝいつの所ゆゝりゆゝ雪
にゆゝゆゝれ柳の所ゆゝ〳〵ゆゝ一ゆゝ八ゆゝ九ゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝ
ゆゝゆゝ斧をゆゝつゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝれゆゝゆゝゆゝ見ゆゝゆゝゆゝ
ゆゝいゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝ

こそくといふ戦く運し是ぞ誠に飛相雲禄の寺
材仏神の加被力みなそれぞれの微志と運ずまじり
ともがありがたさも毛孔に徹し材木にむかひ礼拝する
事くみなだと緑する三十丁余草木一つもなう巌
ちうしこふそび入道萬景いふべき迄峙従山林森々
そろ石のゝ世をいたわりにちからそれやうやくめとるすゝ
そうろ時をうつし給ら鈴芋まなさまり先をとくでも
て拾づさいはておりしろくるあの鈴芋とさしてそれ
とくりしに年七拾子どもは合し手拭相子と手おし
くるしまりなるに験出つらし直つき頬にまいせば念

あくしてれるさるなれば○かけて縄と梅にかけ其のまゝ
に幾所ともなく処それがおのれと亡れ梅の中へ入ところを
ひとり御それが一同に立よりおさへける所く此寺の
とせり　此験希有なるものゆへ志づくみても其のとふたてば
すごりある此鬼へ石にまの術をうれげすた鬼へ野の水くるくれに四本と
其のそし其にまい付鬼へ横にあつりする其のてうしくれつてとあり角に一本あり則鈴芋角見ゆなり　さて材木も
ねまり多くの名有りいづれも形とするべきおまれば入へゝそぐ
都へ告しちかしく手斧をし此木と先渡りと
しくゝまゝし浜松へ帰りぬ

まど山奇談巻之三終